



Title	The Eloquent Body in Beckett's Plays : The Physicality, the Body Sensation, and the Medium
Author(s)	垣口, 由香
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49395
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【7】

氏 名	かき ぐち ゆ か 垣 口 由 香
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 2 4 3 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	The Eloquent Body in Beckett's Plays : The Physicality, the Body Sensation, and the Medium (ベケット劇における雄弁な身体ー身体性、感覚、媒体)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 玉 井 暲 (副査) 教 授 森岡 裕一 教 授 服部 典之 准教授 片渕 悦久

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代20世紀のアイルランド出身の劇作家サミュエル・ベケット（1901－89）を取り上げ、その主要劇作品の劇空間において身体あるいは身体性がいかに重要な機能を果たしているかを、劇テキストとパフォーマンスの両面からの分析を通して明らかにした研究である。論文は、序論、本論7篇、結論、および注、参考文献から構成されており、全体で英文にて140ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約380枚からなる論文である。

序論は、ベケット演劇の第1作『ゴドーを待ちながら』（1954）においてすでに身体の可能性を極限まで試す実験性が生まれていることを述べたあと、こうした身体性という

角度から考察できるベケットの具体的な劇作品を、その輪郭を紹介しつつ指摘する。

第1章は、『ゴドーを待ちながら』を取り上げ、この劇空間は、歌、踊り、パントマイムといったボードヴィルのパフォーマンスを披露できるほど十分な身体性を有しているにもかかわらず、この劇における身体パフォーマンスがしばしば言葉とのあいだに矛盾を引き起こす特徴に注目をし、ここには言葉では言い表せない抑圧された欲望の表象が見られるのだと、論者は主張する。

第2章は、『勝負の終わり』（1958）を取り上げ、論者は、主人公が車椅子に乗ったまま世界周航をまねる遊びに夢中になる姿に注目をし、ここに、十八世紀的航海のパロディを行うことにより、二十世紀における科学への不信、発見・観察・視覚行為への不能性を表象するモチーフが見られると述べる。

第3章は、ベケット劇初のラジオ劇『すべて倒れんとするもの』（1957）を取り上げ、ラジオという言葉と音のみを伝える媒体のもつ意味を考察する。論者は、ラジオという媒体によって創出される劇世界は視覚的要素をもっていないため、ベケットにおいては慣習的身体性とは無縁の霊妙な世界を表象する方法を手に入れたと言えるのであって、この新しい劇的表現がその後のベケット演劇の方向を決定するものであったと主張する。

第4章は、『クラップの最後のテープ』（1958）において、舞台の中央に設置されたテープレコーダーと、録音された若き日の自分の声を再生して、それに耳をすませている主人公クラップとのあいだで繰り広げられるパフォーマンスの意味を考察する。そして、人間の主体がテープレコーダーに奪われ崩壊するありようを鮮やかに捉えた劇として評価している。

第5章は、『しあわせな日々』（1961）を取り上げ、主人公の身体の半分以上が地面に埋められているという身体性の限定されたパフォーマンスにおいて、視覚の絶対優位性が剥奪され、聴覚的なものの優位性が腹話術の声という身体により前景化されているのだと主張する。

第6章は、一九七〇年代に書かれた三つの作品、『わたしじゃない』（1972）、『あるとき』（1976）、『あしおと』（1976）を取り上げ、ベケットがラジオやテープレコーダーといったテクノロジーを駆使して、演劇における声の可能性を拡大しようと実験的な手法を試した活動を分析し、劇空間に現れる不完全な身体の意味を考察する。

第7章では、『ロッカバイ』（1981）を取り上げ、揺り椅子に座った老女が録音された自分の声を聞くというパフォーマンス空間において、繰り返されるフレーズの導入がコーラス的機能を果たしていることを指摘し、この「共に歌う」という行為がベケットの他の劇に見られない特徴として論者は重視している。

最後に、論者は、ベケット劇では晩年になるにしたがって劇空間が縮小し、舞台上の身体が完全性を喪失していくという特徴があるにしても、それとは対照的に「声」のパフォーマンスがますます豊かさ・雄弁さを獲得していったのではないかと結論づけて論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀の現代演劇を代表するサミュエル・ベケットを取り上げ、初期の代表作『ゴドーを待ちながら』から晩年の成功作『ロッカバイ』までの主要劇作品を論の対象として、それらのテキストの劇空間に現われる身体および身体性の孕む意味を多面的に考察した刺激的な研究である。ベケット演劇における身体に注目する研究は、英米および

日本においては従来から行われていないわけではないにしても、ラジオやテープレコーダーなどの表現媒体のもつ意味を重視してベケットの劇作品群全体を通時的に分析した研究は極めて興味深く、ここに窺われる慧眼性は高く評価されねばならない。この論者が見せるベケット劇作品についての読解の卓越性は、特に、現代文化に現れた新しい表現媒体、たとえば機械およびテクノロジーの世界から導入した媒体を駆使する劇テキストを分析した論考において確認できるものであって、その代表はラジオ劇『すべて倒れんとするもの』を分析した論であろう。さらに、論者は、個々の劇作品を言語テキストとパフォーマンス・テキストの両面から、みずからの文学的・演劇的感觉にもとづき、みずからの背丈にに応じて丁寧に読み解いていく論じ方には読者に好感を与えるものがある。

ただし、本論文において問題がないわけではない。ベケット演劇における身体の孕む意味については、もう少し踏み込んだ明確な結論が望まれよう。また、言語と身体性との関わりについても、より深く掘り下げることのできる可能性が残されているように思われる。個々の劇テキストの分析・解釈においてやや恣意的に陥る面が散見されるのも惜しまれる。

しかし、これらの点は望蜀のごときものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。